

論文の内容の要旨

氏名：田 島 佳 征

博士の専攻分野の名称：博士（工学）

論文題名：沖縄のビーチ・パークを通してみた海浜空間の利用促進に関する研究

本論文は6章から構成されている。

第1章は「序論」として、本研究の背景と課題、既往研究の整理、本研究の目的、研究方法、本論文の構成をまとめている。

日本は四面環海の島嶼国であり、その海岸線の総延長は約35,000kmにも及び、このうち砂浜の海岸線延長は約4,900kmである。1955年以降の高度経済成長をけん引した拠点開発方式による海岸線の埋立て造成が三大湾をはじめ各地で進められた。一方、砂浜海岸は、海洋レクリエーションの場として自然環境を生かして利用され、全国的に海水浴場として海水浴の普及に貢献してきた。

しかし、2019年の海水浴場利用者数は最盛期の1/6程度の630万人まで減少し衰退傾向にある。この海水浴場利用者の減少は、新聞報道などで「海離れ」の兆候のひとつとして捉えられているが、その一方で、時代の進展と共にレジャー活動の多様化による選択肢の増加も考えられ、海水浴場利用者の減少が「海離れ」と捉えられることに明確な根拠はなく、十分な調査解析が必要である。

このような状況に対して海水浴場利用者を増加させる取組が、海水浴場を開設する自治体等で実施されているが、海水浴場には旧来からの慣習等があり、利用者の意識や欲求を満足させるための十分な対応が図りにくい状況にある。さらに、利用者の意識や欲求に関するアンケート調査が実施されているものの、海や海辺を訪れる人々の様々な心理に内在する特性が十分に把握されていないため、海水浴場の利用方法、整備方法、十分安全にかつ永続的に管理する方法を明確に示すことができていない。

これに対して、沖縄県では1975年の沖縄国際海洋博覧会開催を契機にビーチリゾート開発が進められると共に「海水浴場」を「ビーチ」の呼称に順次改名し、1990年代以降には海浜整備において背後の土地利用を含めて公園整備する「ビーチ・パーク」の整備が図られた。

このビーチ・パーク整備は、海水浴にとどまらず利用者の多様なニーズに応えることの可能性を内在しており、今後の海浜空間の利用を促進させる一つの方向性を示しているものと考えられる。

そのため、本研究は、「海離れ」の実際を客観的に整理して人々が海という空間に求めていることを明らかにしながら、海浜空間利用を促進するために必要な事項を明示することを目的とした。そこで、まず「第1の視点」として、「海離れ」に着目し、概念的・観念的な捉え方を一掃し、具体的な減少要因を明らかにし、利用者の潜在的な欲求を把握する。次に「第2の視点」として、海水浴を含めた多様な利用が展開されてきている沖縄県における「ビーチ・パーク」整備に着目し、海浜空間の整備経緯、海浜空間の形態、利用客の動向、導入機能と管理方法の実態を分析し海浜空間の利用動向を捉えることで、従来までの海水浴に限定した単一的利用に替わる新たな利用促進方策を見出す。

第2章は「海浜利用に関する動向」として、海水浴や海水浴場の歴史的経緯を整理した。

また、海水浴客の動向（入込客数）を余暇開発センターの動向調査を参照することで統計開始から今日までのデータに基づき整理すると共に、余暇活動の指向状況を踏まえて海水浴の動向を整理した。

第3章は「海離れの要因の把握」として、これまでの「海離れ」の要因把握は概念的であり、本来の海離れの要因を見出していないことを捉えた。従来、人々の意識や関心を把握する方法はアンケート調査が一般的に使われてきたが、この方法は懐柔的な項目による調査結果となるため、選択的な項目では得られない人間の抱くより本質的な情報を捉えることを目指した。そこで、海水浴場や海水浴客の減少に対して新聞等で記事化された「海離れ」記事に着目し、ここに書き込まれたコメント内容から人々の意識に見られる「海離れ」の要因を捉えることとした。

分析方法はWEBに寄せられた「書き込みコメント」を定量分析するテキストマイニングの一つである形態素解析を用い要因を見出した。

分析の手順は、①書き込まれたコメント（4081件）は全て抽出整理。②すべてのコメント内容の言葉や語句の使用傾向及び意味内容並びに未知語、俗語、記号などの使用を整理。③絞り込み後、分析対象の書

き込みコメントを抽出。④抽出したコメントは、記事内容に対して肯定的捉え方か、あるいは否定的な捉え方か、各々類例別に整理。⑤肯定的および否定的コメントを各々テキストマイニング分析の形態素解析を用い文章に見る品詞(抽出語)の使用頻度や傾向を整理。⑥各品詞間(抽出語)に見られる共起関係を把握。分析の結果、「海離れ」肯定要因は衛生的問題、利用者のモラル、環境問題、行動規定であり、これらの要因で使用された語より希求されるものは、清潔感、安全安心、環境対策、利便性であることを見出した。

「海離れ」否定要因は海浜空間で得られる精神的満足、多様な余暇活動や開放感、高揚感、場所性であり、これらの要因で使用された語より希求されるものは、リフレッシュ感や多様な活動の場、雰囲気の演出であることを見出した。

こうした結果から、海水浴場は海水浴の場として限定的に捉えるのではなく、海辺の解放感や眺望性、精神的満足感、環境性などを享受できる場としての重要性を確認した。

そのため、「海離れ＝海水浴否定＝海での泳ぎ否定」「海水浴場の衰退」と捉えるのではなく、レジャー活動の多様化が進展する中で、人々に精神的安らぎを享受できる場所として捉え、人々が日常的に利用できるオープンスペース「海浜空間」としての役割を捉えた。

第4章は「海浜整備に関する動向」として、海浜の整備に関する現状を捉えるため、各自治体策定の海岸保全基本計画や関連文献、参考資料などに見る各種施策を整理した。

この結果、自然海岸としての海浜の保護・保全に関しては各種工法が多数開発され、技術的効果の確認も示されている。しかし、海浜の利用に関しては、人々と最も密接に関係する海浜文化醸成の場所・環境としながらも海浜の新たな利用法の提案等は見られない。特に海岸法が1991年に改正され、「環境と利用」が加えられ「環境の整備と保全」、「適正な利用の確保」が追加されたが、砂浜の保全・回復や海岸環境等の維持、景観創造は掲げられながらも、利用に関しては「地域の意見を反映」は記されているが、具体的な「海浜」の利用増進策は提示されていないことを捉えた。

また、国土交通省の「海水浴場」を「ビーチ」という視点で捉える活用方策では、ビーチを観光資源として位置づけ、ビーチを用いた観光コンテンツの導入・ビーチエリアの観光活性化が提言され、これまでの海水浴場などの海岸線を含むエリア一帯を「ビーチ」として捉えることで、観光資源としての活用の可能性を示唆している。このように国土交通省においても、これまで「海水浴場」と位置付けられていた海浜を「ビーチ」という新しい概念により捉えることで、新たな活用方策を検討している状況を捉えた。

第5章は「レジャー活動の多様化に対応した海浜空間整備と管理のあり方」として、海浜空間の利用方策の停滞を踏まえ、ここでは新たな海浜空間整備と管理のあり方を考究した。

ここでは沖縄本島の海浜整備に着目し、海水浴場＝ビーチの歴史の変遷と近年の海浜整備の動向について文献資料や関連研究から整理した。次いで、海浜利用や管理形態については、現地調査及びヒアリング調査、アンケート調査を実施した。なお、調査は沖縄本島全域における人工ビーチを対象地とし、海浜利用はビーチ来訪者、管理は海水浴場で指定管理者制度を導入した全国の自治体を対象とした。調査の結果、沖縄のビーチ整備の歴史は沖縄の地域開発や法整備と連動しており、1975年の沖縄海洋博覧会以降、北部を中心にリゾートホテル開業に合わせて多くの人工海浜が整備された。その後、1990年以降に県民のレクリエーションニーズに対応した海浜整備として、背後の土地利用と一体とした「ビーチ・パーク」型の整備展開を見出し、海水浴に限定した整備ではなく、海浜空間を利用した親水活動や海浜空間の持つ快適性を享受できると共に、地域的な文化として慣習化した多様な活動の展開を可能とした整備方策を捉えた。

利用に関しては、ビーチを来訪する利用者らは、単一目的と考えられがちであったが、今日的には複合的で多目的な活動欲求を持った海浜利用者が数多く見られることが判った。

管理に関しては、従来までの公共の管理ではなく指定管理者制度を導入することで、自治体においては、行政費用や業務負担の軽減となり、指定管理者は、「ビーチ・パーク」として施設全体の総括的管理や施設運営に関しても収益性を伴う事業を実施することが可能となり、利用者へサービス向上に寄与していることが判った。

こうした動向を反映して、従前までの線的(海浜)な整備から、面的(海浜+公園緑地)な整備と、利用者サービスの向上が可能な総括的な管理により、利用者に満足感を提供できる事が重要であることを捉えた。

第6章は「結論」として、1章から5章までの結果及び考察を踏まえ、「人」「場所」「管理」に着目して、今後の海浜空間の利用促進においては、単一的な利用空間の整備ではなく、利用者の海浜利用に見られる多様化した活動欲求に呼応することが肝要で、通年利用が可能な施設整備や周辺施設及び背後地域との一

体的な連携を図ることが、利用者欲求に応える上では重要性の高いことを見出した。そのため、①利用者のアクティビティに対する新たな希求の把握。②多様なアクティビティに対応した背後地を含めた面的整備。③希求される海浜空間利用に対応した総括的な管理の統合により、「海浜空間の利用促進」が図られるものと考えられる。